

日、約一万二千の正規兵からなる偽裝保安隊が上海の協定線内に送り込まれた。昭和七年の上海停戦協定は、上海に、軍備禁止地帯を設定していたから、これは重大なる違反行為であった。

他方、支那事変の勃発により、揚子江上流の日本人が上海に引き揚げてきた。その日本人引揚者の数はおおよそ二万二千人となった。

八月十一日、在留邦人を保護するため、日本は海軍の陸戦隊を上海に送った。日本の陸戦隊は四千人となったが、トーチカとクリークを楯とする支那軍はすでに十五万にふくれあがっていた。

このため八月十三日夜、日本政府は在留邦人の生命と財産を保護する目的で、さらに内地二個師団の上海派遣を決定する。

大山大尉虐殺事件から五日後の八月十四日、対立と緊張が強まるなか、支那空軍機が上海を爆撃した。午前十時に数機が飛来して、日本の総領事館、陸戦隊本部、軍艦と、上海の市街地を空爆した。さらに、午後四時半頃に十数機が飛来して停泊中の軍艦「出雲」を爆撃し、フランス租界と共同租界にも爆弾を投下した。

『チャイナ・イヤーズブック』一九三八年版は「支那軍機、国際租界を空爆」と明記し、死者千七百四十一名、負傷者千八百六十八名と記録する。その大半は支那人であった。自国民の頭上に、支那軍機が爆弾を投下したのである。意識的に自国民を攻撃した事例としては「世界記録」であろう。

これにたいして八月十四日の夜、日本の海軍航空隊は支那各地の飛行場を爆撃した。

八月十五日、蒋介石は総司令部を設置し、全国総動員令を下令した。支那全土が四戦区に区分さ